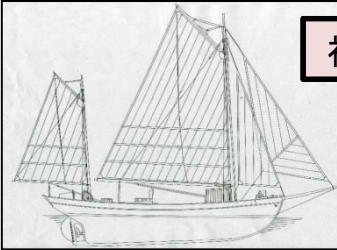


鹿児島県漁業調査船の歴史

資源管理部・「くろしお」

漁業調査船の全体像

海面関係では、明治43年に建造された『竹島丸』から平成13年の『3代目・おおすみ』まで、本場と分場を合わせて合計22隻が確認されている。また、内水面関係では、指宿内水面分場が池田湖で使用した2隻が確認されている。



初代調査船『竹島丸』

初代調査船は『竹島丸』で、明治43年7月に進水している。この調査船は、当時としては最新式の石油発動機附西洋型漁船で、総トン数は19.5トン、馬力は30馬力であった。また、特筆すべきことは、大正3年の桜島大噴火の時、桜島住民の避難・救助に活躍したことであり、噴火による漁業影響調査にも使用されている。

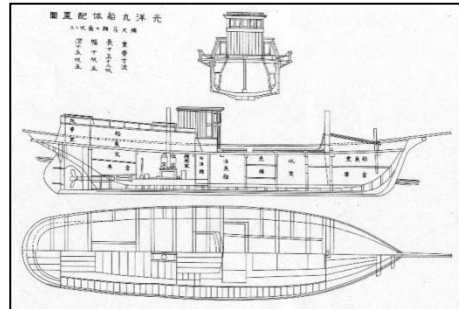
『竹島丸』設計図（明治43年進水、19.5トン、30馬力）

『初代・松島丸』と『初代・光洋丸』



『初代・松島丸』（大正3年、7トン、8馬力）

・大正3年に枕崎の造船所で建造され、大正8年には、水産高校へ保管転換され『錦江丸』と改名。同年10トン12馬力の松島丸が建造された。



『初代・光洋丸』（昭和3年、19トン、40馬力）

・昭和3年に串木野村の岡下造船所で建造された。本船は、戦災を免れ、終戦直後の昭和20年12月に熊本海域の魚類調査を行った記録がある。

『かもめ丸』から『おおすみ』まで（1）



『かもめ丸』
（昭和25年、19トン、50馬力）

・西之表分場所属船として竣工したが、組織統合に伴い昭和31年からは大島分場所属の調査船となった。また、同時期に同型船である『おほとり』『ちどり丸』が建造された。



『しらさぎ』
（昭和26年、19トン、65馬力）

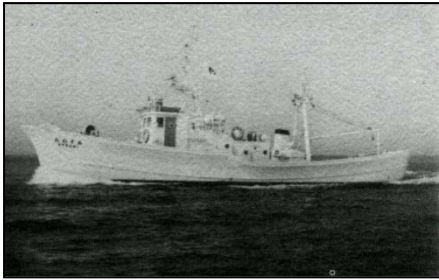
・昭和26年に志布志分場所属船として竣工したが、31年度以降は漁業指導取締船として活躍した。理由は、他の調査船と比較して馬力が強かったためとされている。



『かもめ』
（昭和35年、15トン、60馬力）

・老朽化した『ちどり丸』（19トン、50馬力）の代船として、昭和35年3月に竣工したが、馬力は10馬力向上したが、船体は4トン小さくなっている。

『かもめ丸』から『おおすみ』まで（２）



『初代・おおすみ』
(昭和46年, 38トン, 260馬力)

・昭和35年に建造された『かもめ』が老朽化し、調査機器等も古くなったため、その代船として長崎市の井筒造船所で『おおすみ』が建造された。



『2代目・おおすみ』
(昭和60年, 55トン, 750馬力)

・初代『おおすみ』の代船として、昭和60年2月に竣工した。鹿児島県の桜島と県本土を表現したシンボルマークが描かれていた。



『3代目・おおすみ』
(平成13年, 63トン, 1000馬力)

・2代目『おおすみ』の代船として平成13年2月に竣工した。平成22年度からは、漁業指導取り締まりとの兼務となり、67トンに増トンされた。

『初代・照洋丸』から『くろしお』まで



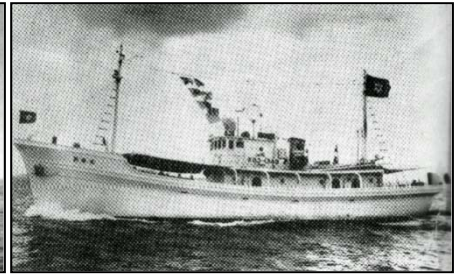
『初代・照洋丸』
(大正11年, 50トン, 75馬力)

・大正末期、カツオ漁業が本県水産業の重要な位置を占めるようになり、老朽化した『竹島丸』の代船として大正11年に竣工した。写真は、枕崎沖でカツオ釣り操業中の『照洋丸』



『2代目・照洋丸』
(昭和24年, 49トン, 117馬力)

・遠洋漁船としては中型で、航続力は10昼夜であった。鹿児島港を母港とし、試験操業中は定員12名のほか、臨時漁夫25名が乗り組み、総員36名で調査を行った。



『照南丸』
(昭和30年, 98トン, 300馬力)

・昭和24年に日南市の日南造船所で建造された『2代目・照洋丸』は、機関故障が多いなどの問題があり、その代船として2倍近い規模を有する『照南丸』が建造された。



『初代・さつなん』
(昭和43年, 116トン, 520馬力)

・昭和30年に建造された『照南丸』が老朽化したため、その代船として昭和43年8月に竣工した。深海エビ漁場開発やカツオ自動釣機の試験等を実施した。



『2代目・さつなん』
(昭和56年, 288トン, 1400馬力)

・昭和56年3月に竣工した本船は、北部太平洋におけるビンナガ魚群調査のほか、沖合や近海の各種漁業調査や海洋生物調査ができるよう、多目的型の漁業調査船として建造された。



『くろしお』
(平成8年, 260トン, 1600馬力)

・平成8年2月に竣工した本船は、県内の漁船漁業の経営安定と水産業の振興を図るため、主として沖合・近海海域での海洋観測、各種漁業調査並びに資源調査等の多目的な調査を行う。

漁業調査船「くろしお」の紹介

資源管理部・「くろしお」

漁業調査船「くろしお」は、最新鋭の調査機器等を装備し、「動く研究室」として、迅速な海洋環境の把握、資源の評価、漁海況予測や資源開発等に努めています。

今後も漁業者の期待に応え、本県水産業の振興に貢献していきたいと考えています。



(主要目等)

竣工	平成8年2月
総トン数	260トン
全長	46.61m
幅	8.00m
深さ	3.50m
船質	鋼
主要機関	1,600馬力
速力	12.0ノット
最大搭載人数	24名

(主な調査観測機器)

魚群探知機	1台
スキャニングソナー	1台
潮流計	1式
計量魚群探知機	1式
測深儀	1式
観測ウィンチ	1式
多層型流速計	1式
CTD測定装置	1式
海底地形探査装置	1式

《近年の主な調査航海》

① 沖合定線・卵稚仔調査

本県の漁海況の予測や資源量推定の基礎資料とする目的で月1回定線を調査します。

② 秋季ビンナガ漁場調査

ビンナガマグロの漁獲を回復させ、遠洋カツオ一本釣漁業の経営改善を図ることを目的とし、30日に及ぶ航海で三陸沖を調査します。

③ クロマグロ稚仔魚分布調査

沖縄本島周辺で産卵するクロマグロの稚仔魚の回遊ルートを明らかにし、加入量モニタリングも念頭に奄美海域において2mリングネットを用いた定点調査です。

④ アオダイ(ホタ)標識放流調査

漁獲量が減少傾向にあるアオダイにおいて合理的な資源管理と持続的利用を図ることを目的とし、沖永良部島周辺で標識放流調査を行っています。

⑤ メバチマグロ漁具改良試験

高値で取引されるメバチマグロの有効利用として、旗流し漁具を深所で漁獲されるメバチマグロ用に改良し、奄美大島周辺海域においてその可能性を調査しています。

① 沖合定線・卵稚仔調査



② 秋季ビンナガ漁場調査



⑤ メバチマグロ漁具改良試験



④ アオダイ(ホタ)標識放流調査



③ クロマグロ稚仔魚分布調査

